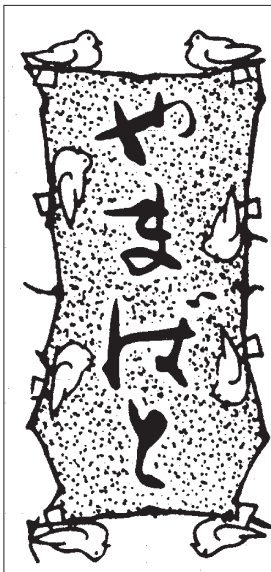


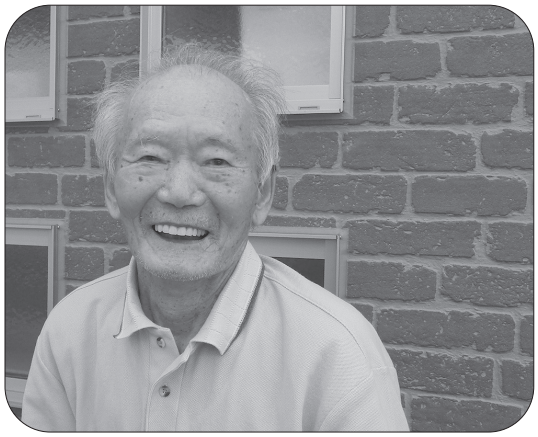

発　行
社会福祉法人 牧ノ原やまばと学園
〒421-0412 静岡県牧之原市坂部2151番地2
TEL:0548-29-0221 FAX:0548-29-0157
E-mail:honbu@yamabatogakuen.jp
http://www.yamabatogakuen.jp/
機関誌代は無料です。

# 少子超高齢社会におけるニーズ

（一）

三月のよく晴れた暖かい日、「やまばと希望寮」のAさんが、車いす用の福祉車両に乗り、仲間や職員たちに見送られて、高齢者施設「聖ルカホーム」へ出発しました。

じっと目をつぶったままのAさん。観念しているようでもあり、いつものように穏やかにうつらうつらしているようにも見えました。周囲からは、「さようなら」「また会いましょう」「お元気で！」の声。その声は別離の悲しさよりも、どこか明るい響きがありました。それもそのはず、Aさんが向かう聖ルカホームは、同じ法人内の高齢者施設であり、すでに障碍者施設から転出した人も幾人かいて、彼女にとって馴染みの人たちもいるからです。遠くの、見知らぬ施設へ行くわけではなく、いわば近所の親戚の家に行くようなものなので、みんな、安心した気持ちで、にぎやかにお見送りしたのでした。



（二）

聖ルカホームが開設されたのは、一九八一年、今から四十二年前です。当時は、特別養護老人ホームのイメージは、「姥捨山（おばすてやま）」（年をとってあまり役に立たなくなった人を移す場所）のように受けとめられていて、暗いもの、好ましくないものでした。

「ここに老人ホームが建つと、土地の価格も下がって、迷惑だ」「建設、絶対反対」という声が大きく、建設用地は二転三転、なかなか決まりませんでした。それが、二〇一三年、同ホームの移転新築計画が始まったときには、現地の人々からは残念がられ、新しい移転先は、すぐ決まったのでした。

この変化をもたらしたものは、少子高齢化のさらなる加速。このため、誰もが、自分の老後を意識し福祉に関心を抱くようになったこと、福祉はもはや特定の貧しい人のためのものではなく、高齢化する全ての人のためのものになったこと等が考えられます。

（三）

全人口に占める高齢者（六十五歳以上）の割合が七％を超えると、「高齢化社会」と言われますが、日本が初めて「高齢化社会」になったのは一九七〇年で、当法人が、最初の施設「やまばと学園」を開設した年でもありました。当時は社会の高齢化に関心を持つ人は少なかったのですが、「やまばと」の創設者たちはこれを意識し、一九八一年、将来の高齢社会を見据えて、特別養護老人ホーム「聖ルカホーム」を開設、高齢者福祉にも着手しました。その目的の中には、一般市民の高齢化は勿論、施設の障碍者や職員の高齢化にも備えたいという意図がありましたが、長い年月を経て当初の願いが具体化されていることに感慨を覚えます。

例えば、前述のAさんを初め、他にもかなりの障碍を持つ人がこれまで高齢者施設を利用してきました。職員に関しても、聖ルカホームで晩年を過ごした方がいます。一般市民についていえば、X氏は知的障碍をもつBさんの父親でもありましたが、九〇歳を超えて聖ルカホームへ入居。その後長女のBさんもホームへ入り、X氏が危篤状態になった時は父親の部屋を訪れ、最後の面会をしたのでした。

（四）

ところで、一九七〇年に「高齢化社会」になった日本は、一九九五年

には全人口に占める高齢者の割合が「14％」を超える「高齢社会」になり、二〇一〇年には「21％」を超える「超高齢社会」に突入。

総務省統計局の人口推計によると、二〇二二年九月十五日現在、総人口は一億二千四百七十一万人、高齢者人口は三千六百二十七万人。高齢者の割合は、「29・1％」となり、世界最高の数字になっています。

今回、七十五歳以上の人口割合が初めて15％を超えたそうで、いわゆる出生率の高かった団塊の世代（一九四七年～一九四九年生まれ）が、二〇二二年から七十五歳を迎え始めたためと推定しています。

（注）内閣府が公表した「令和四年版高齢社会白書」によると、日本の総人口は令和三年十月一日時点で一億二五五〇万人。うち、高齢者人口は三六二一万人で、総人口に占める割合は28・9％となっている。

（五）

高齢者の数が多くても、老後を支える現役世代の数が多ければ、社会保障の財源は確保され、福祉サービスを提供し続けることができますが、現実には、少子化により、現役世代の人口減少が続いているので、日本の福祉制度の持続可能性が問われているわけです。

我が国で、合計特殊出生率（TFR＝total fertility rate／一生の間に女性が生むと推計される子どもの数の見込み）が2・0を切り、少子化への警告が出され始めたのは一九七〇年代でしたが、人々の関心は薄く、一九九〇年になって初めて、「1・57」まで落ち込んだことにショックを受け、少子化対策が意識されるようになりました。ですが、その後も少子化傾向は改まらず、厚生労働省の人口動態速報によると、二〇二一年度のTFRは「1・30」となっています。

二〇二二年九月現在の「合計特殊出生率世界ランキング」では、日本は、二〇八ヶ国中、一九一位。「超少子社会」の将来が案じられます。

（六）

「超高齢社会」「超少子社会」が進む中で、国は、今後の福祉施策として、二〇二五年までに地域包括ケアシステムを構築することを掲げました。地域包括ケアシステムとは、「高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援」という目的のもと、高齢者が（たとえ重い要介護状態となっても）、可能な限り住み慣れた地域で生活を継続できるよう、地域一体で支援する体制を意味しています。二〇二五年を期限としたのは、この年以降に、団塊の世代が七十五歳（後期高齢者）になり超高齢化が一段と進むためです。

この体制によれば、様々な生活課題を「自助・互助・共助・公助」の連携で解決することになります。

「自助」は、自発的に自身の生活課題を解決すること。住み慣れた地域で生活を送るために、自力で必要なサービスを購入したり、介護予防活動に参加したり、検診や病気早期発見の受診をしたりする等です。「互助」は、個人的な関係性を持つ人間同士が助け合い、それぞれが抱える生活課題をお互いが解決し合うこと。「共助」は、医療・年金・介護保険・社会保険制度など相互の負担で成り立っている制度の活用。「公助」は、「自助・互助・共助」では対応出来ない案件（困窮等）に対し、生活保障など税を活用した社会福祉制度を用いて解決することを指します。

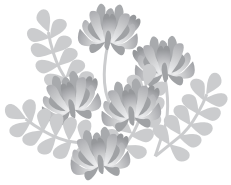
（七）

「地域包括ケアシステム」が今後、どのような将来をもたらすのか、案じられる面もありますが、超高齢化、超少子化、人口激減という日本社会の現実を考えると、危機感を抱いてこの地域ぐるみの支え合いに関与すべきと考えます。

医療・介護・リハビリ、介護予防等、複数の福祉サービスが地域の中で連携している光景は、住民に安心を与えることでしょう。

いろいろ書きましたが、少子高齢社会の中で、高齢の方たちが最も求めているものは、システムや制度の完備もさることながら、最終的には、自分を大切にしてくれる人との出会いや交わりだろうと思います。心身が弱くなっていく中でも、生きる望みを見出し、笑顔になれるよう、福祉関係者は優しい対応を心がけたいと願うことです。

〈理事長〉長沢道子



# 里子の結婚を控えて

大聖寺住職　浅野正道

里親になって二十年。初めての里子として七才で我が家にやって来た男の子が、まもなく二十七才。この春結婚します。家内と私はお相手の親御さんに御挨拶するため、四月に宮崎へ出かける予定です。先方さんも心待ちにしてくれていますが、何よりも本人が「実家の親が来る」と、とても楽しみにしているのが伝わって、こんな幸せな九州旅行をする日が来るとは思いもしませんでした。

昨夏、実の娘が結婚することになり、その結婚式に「彼女を連れておいで」「二人で参列して」と言ったところ、招きに応えて、九州から二人でやって来ました。彼は懐かしそうに近所を彼女に案内していましたが、帰って来て、「隣のおじさんが、畑に居たから挨拶してきた」と言います。見ていた近所の方が後で、「隣の家のトラクターに乗せて貰ったりしてた子だね。大きくなって。育てた甲斐があったねェ」と感慨深そうに言いました。そう、本当に。近所の方達には、お寺の四人目（実子が三人居ますので）として、当たり前の様に可愛がってもらいました。

二十年前、彼がこの家へやってくる一ヶ月程前、私は地域の常会で皆さんにこう言いました。「里親になりました。家の子どもの四人目として通学班に入れてもらい一緒に小学校に通います。どうか彼に何も聞かないでやってください。」以来、余分な事を聞かれる事も無く、皆さんに本当に暖かく受け入れて頂きました。

「ぼくの本当のお母さんはきれいでやさしくて・・・」と言っていた彼が、初めて里母を小さな声でそおっと「お母さん」と呼んだ日の事を忘れません。ですが、それで『めでたし』ではありませんでした。新しい家族の始まりと言えばかっこいいですが、二十年間には実に色々な事件が起こります。「ドラえもんリュック背負って家出ェ！」今となっては笑い話の数々。ミニパトが出動してくれた事も。数時間で見つかって、今では笑い話でも、見つかるまでは、家内の顔に血の気はありませんでした。まさかと思う様な谷を覗き込んで捜しました。一生懸命捜した事が彼の心に少しは染みたのかもしれません。大きくなってから「捜してくれた」と言っていましたが、嬉しかったんだろうと思います。

里子との暮らしの中で、大きな役割を果たしてくれたのが実子達です。親が里親になると伝えた時、末娘は中学三年。三人目の里子を受けると言った時、「その子が中学になる時お父さんは幾つになっている？」と心配してくれました。案の定、ゲーム、スマホ、ファッション、いろいろなものが必要で若い親御さん達にとてもついていけません。それを察した娘達がよく補ってくれました。隣の奥さんからは、「お姉ちゃんが買い物に連れてってくれて、Tシャツ買ってもらった」と、里子の彼が得意気に見せていたことを教えてもらいました。ドラえもんの新作映画だって見遅れる事もなく、連れて行き、本当に姉妹でよくやってくれています。

しかし、里子の彼自身も又、この家を実家と呼ぶには、普通に親元で育っていれば経験する事の無い葛藤をし、努力をしたのだと思います。

あの日、担当の方は、施設で初めて会った私達を彼に紹介して、「お泊りに行くよ」と言い、「二、三回行って君が良ければ、そのお家から学校へ通うんだよ」と。決めるのは君だよと言うニュアンスは見せながらも、良かれと思う大人達の総意で話は進んでいき、彼は私達の車に乗り込みました。小学一年の暮れの事です。園ではその日餅つき会があったのに、どんなに心細かった事か。その日の昼食が、迎える里母として精一杯心を込めて手作りしたハンバーグだった事も、彼は全く覚えていないと言います。その日は初めてでしたから、日帰りで、園へ送って行くと、出迎えた寮母さんのエプロンの中へ飛び込んで行った幼かった彼の姿を思い出します。

「この子達に何としても人並みの幸せを掴ませる」、そう願って里親の務めを果たしてきましたが。それを彼が今、手に入れつつあると思うと、こんなに嬉しい事は無いと思います。同時に、近所の方や檀家の皆さん、学校の先生方、これまで出会った多くの方々が彼を成長させて下さったと思い、感謝の気持ちで一杯です。

## グループホーム わかば・もくれんの正月

わかば・もくれん　高杉和成

「グループホームわかば」と「グループホームもくれん」では、数年前までは年末年始は帰省し正月は家族と共に過ごす方々もいらしたのですが、新型コロナウイルスの影響も大きく、入所しているご利用者全員が施設で元旦を迎えるようになっています。

今年度もわかば・もくれんのご利用者は帰省の予定がほぼ無かったので、施設としても年末年始をどのように楽しむか検討・計画していました。「もくれん」では、大晦日に紅白歌合戦を観る事を楽しみしているご利用者も多いので、リビングに集まり皆で鑑賞し、小さめのお椀で「年越しそば」を食べて、年末年始を楽しもうとしていましたが…。

12月23日にコロナ感染陽性者が両施設にて確認され、「わかば」では感染が入所者全員に広がり、職員も感染する事になりました。

普段自由に移動できている環境下での隔離にはご利用者も職員も戸惑いがあり、ありとあらゆることが平常時と違う対応となりました。特にクラスターとなった「わかば」で生活するご利用者、支援・世話をする職員は疲弊の色が濃く、1月8日にご利用者全員が隔離解除になった時にはよくぞ耐えきってくれたと、平常時の生活に戻れたことに安堵しました。

「もくれん」では1名が陽性者となりましたが、感染が広がる事無く収束しました。

陽性者が1名だけでも、感染が広がらないよう隔離・ゾーニングは徹底。ご利用者も、これまでの度重なる居室待機の対応・経験が生きたのか、隔離解除までの期間をリビングに出る事なく居室での生活に協力していただけました。大変な思いをした正月でしたが、忘れる事の出来ない出来事となりました。

二〇二三～二〇二四の年末年始は、ゆったりと過ごし、皆と笑い合える楽しい正月を迎えられるようを願います。（施設長兼サービス管理責任者）

## A型事業所 カサブランカで働く思い

（これは、カサブランカの皆さんのお話を聞いてまとめたものです）

私たちは、島田市阿知ケ谷の山間にある就労継続支援A型事業所「カサブランカ」で働いています。カサブランカは、在籍六か月未満の人三名、一年未満二名、三～四年程四名五年程三名、十年程二名と、開所当初から勤めている人もおり、現在十四名の仲間が市の委託を受け、リサイクル事業を行っています。

旧島田市や金谷地区、遠くは初倉地区、吉田町から、自家用車や自転車で通っています。雨の日も風の日も強風に煽られながら、自転車で通勤するのは大変で、特に橋を渡るのはとても怖く、暴風対策がされていたらどんなによいだろうといつも思いながら通っています。仕事をする上では体調管理が大変です。通勤だけで汗や雨で全身ビショ濡れ、外の仕事でまた汗を流します。通勤中に転倒して骨折してしまったり、力仕事の影響でヘルニアになり手術・リハビリを経て復帰した人もいます。毎日一〇〇～一三〇個のカゴを洗う為、手荒れも酷く、ゴミの仕分けがされていないことで危険物や、蛇やムカデなどの生き物も混入しているなど、危険を感じたことも度々ありました。夏の暑さで熱中症になることもありますが、時々差し入れされるアイスやポカリスエットでやる気アップ、生き返るような気持ちになります。今年度は六合駅間の送迎が始まり、通うのが随分楽になりましたが、仕事を続ける事は大変なことだと実感しています。休みの日は疲れをとることで精いっぱいですが、将来また一般企業に戻りたいので、今は辛くても頑張るしかありません。給料は貯金、家族へのお礼が主です。できれば、広い休憩場所で休憩できるようになること、コロナ感染症が落ち着き、また皆で旅行に行けるようになること。そして、給料が上がってくれたら何より嬉しいです。

取材（編集委員 西村美恵子）

## 田島誠一先生による「管理者研修」を受講して

法人本部　板倉　仁

牧ノ原やまばと学園では、二〇四〇年問題をまえに、地域福祉、地域共生社会の実現など、今後、社会福祉法人が直面する問題に対して、新たに中長期計画を作成し、課題解決にあたることとなりました。二〇二二年度の管理者研修として、中長期計画の作成について学ぶことになり、施設長たち二十三人が、講師の田島誠一氏の指導のもと、全国社会福祉法人経営者協議会作成の「アクションプラン二〇二五」の示す「一〇の経営原則」に照らし合わせて、法人五十年のたな卸しから、スタートとなりました。六月の「理念の確認と共有、課題解決の方法」から二月まで月一回、最後の中長期計画案の発表を含めると全9回を取り組みました。今回の案は、施設長たちがそれぞれで検討したものなので、法人で決定したわけではありませんが、将来へ向けての課題がある程度示されたのではないかと思います。現場での介護、支援、相談に入る施設長が研修に出る間、職員が協力してケアに空きができないようにしてくれましたことにも大変感謝しています。

コミュニティセンターぶどうの木　神谷　美代枝

中長期計画策定という重いテーマに達成できないと思い込んでいましたが、グループワークは自由で楽しく、課題も仲間となら達成可能だと前向きに考えられました。これまで、田嶋先生の講義やコメントから、あるべき姿を明確にし、現実の問題と達成根拠を説明いただきより理解することができました。何よりも師や仲間を信頼できたこと、遅れた時代感覚に陥らず事業を継続していく管理者としての使命に気づかされました。これからも仲間とともに学び課題解決に向けて取り組んでいきたいと思います。（施設長）

ワークセンターやまばと　やまばと希望寮　田澤　岳大

最初は、月1の研修と聞き、「はぁ他の業務が…」と考えていました。しかし、田島先生の軽快なトークと近況や実体験を交えた講義でとても勉強になりました。前は、1事業所で地域における福祉の充実を考えてきましたが、研修を重ねるにつれて、法人内の事業所を沢山巻き込み、地域と法人の福祉の充実をどのようにすれば良いか考える様になりました。長期ビジョンを見据えながら、今後は取り組んで行きたいと思います。（施設長）

## 初心忘れるべからず

吉元　ジャケリン

仕事がストレスになると、私はいつも深呼吸をして自分のやるべきことを思い出します。介護の仕事は正直大変ですが、ご利用者様の笑顔や感謝の言葉に胸がいっぱいになります。

私たち家族は、不測の事態により専門家認定試験合格後に日本に引っ越ししなければならなくなりました。日本への引っ越しは世界が変わったようでした。最初はとても大変で、日本の生活習慣、日本語の話し方、読み方、書き方も知りませんでした。実際、すごいストレスになりました。でもこれは、神様の計画だと信じました。生きていくために日本語の基礎を独学で勉強しました。大学で勉強したことは関係のない仕事に就き働きました。言葉の壁があるので、自分の体力だけを生かせる会社で働くことにしました。でも段々と日本での生活が好きになりました。日本の美しい景色、豊かな文化、そして尊敬すべき人たちに出会い感謝しています。

フィリピンの人はとても家族思いです。私たちも、両親、祖父母を世話してきました。私はフィリピンの家族から遠く離れているためとても寂しく悲しいです。

聖ルカホームで働き始めた頃は、デイサービスのケアと特別養護老人ホームのケアの違いに疑問を感じていました。しかし、施設長とすべてのスタッフは、みんなとても親切で優しく接してくれました。私も大学で学んだことを応用したりして、今では、ホームの利用者様をケアすることが楽しみになっています。

自分の為だけでなく、家族のためにもっとチャレンジしたいと思いました。正社員になれば安定した収入も得られます。私たちの子供は成長しており、長男は、大学に通っています。安定した収入は、私たちの生活のニーズに必要です。また、会社でより効率的に働けるように多くのことを学びたいと思っています。まだ、日本語のスキルも十分ではないので、喜んで学びたいと思います。この機会に感謝し、聖ルカホームの利用者様の為に介護者としての仕事がより良くできるよう、これからも一生懸命頑張りたいと思います。（介護員）

# 歩みのあと

（1月1日～2月28日）

## ●個別のニュース

**〈法人〉**1／20評議員選任・解任委員会、池上千穂様を評議員に選任。1／27防災委員会 BCPの検討。1／30事務統一検討会 事務統一に向けての話し合いスタート。2／7賞罰委員会 虐待案件について。2／16ぎんもくせい運営について 島田市と理事長が話し合い。2／17牧之原市産業雇用ネットワークへ板倉事務局長。2／22吉田町障害者福祉推進委員会に長澤理事長参加。2／24志太榛原地区自立支援推進会議に長澤理事長参加。2／24杉山会計による月次監査。

**《垂穂寮》**1／25大津地区買い物支援への車両提供 1／29～2／20新型コロナ陽性によるクラスター発生。利用者44名、職員20名が感染した。2月玄関ホールに島田市車いすステーションを設置、地域住民の方が自由に借りることができるようになる。

**《みぎわ》**1月 動画視聴研修の活用で、パート職員の勉強会。2月 隣接する施設でカラオケを楽しむ。2／3節分、大きな声で「鬼は外、福は内」と豆まき。2／28防災訓練実施。

**《やまばと希望寮》**元旦に凧あげ、カラオケ等を行い、お正月を満喫。1／11鈴木勝利さんによる音楽教室。2／3節分で豆まき、全員で玉を鬼に投げて退治。

**《わかば・もくれん》**身体能力の維持の為、生活リズムを崩さないように散歩等の運動を継続。1／12コロナワクチン5回目接種。

**《花もも》**1／20クレヨンと絵の具ではじき絵作り。うさぎ、花火、チューリップと、いろんな絵が出来上がり笑顔がはじける。2／7クラフトクラブは紙粘土で干支ウサギの置物作り。ビーズやモール、絵の具で個性豊かな作品が出来上がる。宮美殿でお食事会。還暦祝いを兼ね、食事をしながらご利用者のスライドショーを皆で鑑賞。

**《カサブランカ》**1／4給食が休みのため、仕事始めは、カサブランカで昼食を提供。1／9祝日でも市のごみ収集日の為、ご利用者は出勤。2／3節分。おやつ時に恵方ロールをみんなで食べて、1年の健康を願う。2／14ワークセンターやまばとのお菓子セットを利用者にプレゼント。

**《希望の家》**「チームワーク向上」を目的に、第4回ボッチャ大会。大熱戦を繰り広げる。

**《ふれあい》**1月 新年会で家山八幡宮に初詣。お弁当を皆で食べる。2／14バレンタインデーチョコのプレゼント。ご利用者は大喜び。2／17歯科衛生士から歯磨きの指導。日頃磨き残しがある箇所を聞き、一人一人に合った磨き方を教えてもらう。

**《なのはな》**1／5昼食作り、感染予防の為 個別に軽食を作って食べる。サポカレ研修を視聴し、虐待やストレス対策について学ぶ。

**《あさがお》**1／17ボランティア・本多幸恵様による恒例のお餅つき。退職職員も手伝って、美味しくいただく。1／17青野先生のリフレッシュ体操。食後のシェイプアップと、みなで張り切る。

**《WoCやまばと》**2月 ケーキ依頼があり、自主製品としてカップケーキ作成に取り組む。1／21ご利用者の「三十歳の祝い」の会。昼食や、飾りつけを全員で行い楽しむ。2／3節分で豆まき。全員で玉を鬼に投げて退治。2月 バレンタインデーの自主製品では、ご利用者と職員が携わり、心を込めて作る。

**《コスモス》**1／13ご利用者の20歳のお祝い。祝いの言葉と、記念品を贈呈。2／10「食事マナーを学ぼう！」とバス旅行代替企画。大井神社宮美殿にて基本的な食事マナーを学び、食事を楽しむ。大きな会場で緊張するも、次第に慣れ会食を楽しむ。

**《かたくりの花》**1／13新年会。和太鼓の音と共に獅子舞が踊り、大黒様に恵比寿様が登場すると、皆は大興奮。新年の目標を千代紙に書いて、玄関に飾りつけ。成人を祝う会／ご利用者がスーツに着替えると、皆にお祝いされ最高の笑顔。2／3節分「豆まき」では島田市ゆるキャラ「おしまちゃん」と赤鬼青鬼が来訪。緒に歌い踊り豆まきを楽しむ。笑顔いっぱい。／かたくりで初めて獲れたレモン4個をレモンティーにして頂き、ホットひと息。

**《さくら》**1／4仕事始め、新年会と今年の決意表明。「風邪を引かない」「いろんな仕事に挑戦したい」等の発表。2／14保護者よりバレンタインデーチョコの差し入れがあり、皆で分け合う。2／28来月の行事は「ボーリング大会開催」と宣言したところ、皆の歓声。

**《レタスクラブ》**1／10愛宕神社に初詣。1／11凧あげを皆で楽しむ。1／12ランチでやきそば作り。1／24スイーツつくりは白玉団子。1／25外食でラーメンを食べる。2／28パンフレットを役場や連携福祉施設に配布し、途中で河津さくらを鑑賞。車を降りて桜を間近かで眺めたり、写真撮影など、ご利用者は季節の移ろいを感じ楽しんでいました。

**〈生活支援センターやまばと〉**2月 常に利用者の立場に立つたサービスを提供するために、事例検討を引き続きセンター定例会内で実施。3月 強度行動障害、権利擁護ケースのロングショート調整・緊急対応。コロナ感染症陽性者が出たため、家族支援・食料支援の手配を行っている。

**〈聖ルカホーム〉**新年会。お寿司と手作りケーキで新年を祝う。誕生日会は手作りおやつで祝う。買い物は移動販売車「とくし丸」で。

**《グレイス》**各ユニットで「新年会」。恵の丘神社への初詣では鈴を鳴らしてしっかり手を合わせる。書初め・福笑い・お鍋や炊き込みご飯で新年を祝う。ご利用者との外出。寒い日でしたが、帰りにはテイクアウトのカレーを購入、大満足される。坂口谷川の河津桜でお花見。廊下に作った面会コーナーでご家族と久しぶりにガラス越しでの面会。職員手作りのどら焼きも期待通りの美味しさで大喜び。

**《相寿園》**2月 今年度から実施の「誕生月外出」。皆さんの関心や楽しみを担当職員がどんなふうに聞き取り、引き出していくのかも大切な時間。ご利用者の俳句（部）を廊下に展示し、皆でたのしんでいます。

**「寒空に　春はまだかと　ふきのとう」「春遠く　八十路のあわれ　夢で泣く」「園の庭　メジロ待つのか　梅の花」「紫木蓮　一枚脱いで　顔を出す」**

**《ぎんもくせい》**1／25島田消防署立入検査。警戒態勢など指摘有り。1／25大津地区買い物支援に公用車1台貸出し事業開始。

**《真菜》**お習字クラブふれあい書道展に14名が作品を出展。1／10～12初詣は石雲院へ。ご近所のご利用者が中を案内して下さる。ご利用者の日々の歩行の成果がみられ、階段をスタスタと上がって行かれる。2／22昼食作り。三食丼とお味噌汁と炒り卵。ご利用者と一緒に作り、美味しく頂く。2／17おやつ作りは、ご利用者のリクエストから、お好み焼き。以前、大阪に住んでいたご利用者のレシピから、ソースまでご手作りし美味しくいただく。2／2～4 豆まき。年男と年女のご利用者が福の神になり、豆まきを楽しむ。

**《さふらん》**利用者、ご家族からのアンケート結果を職員に伝えた所、感謝の言葉が多く感激。

**《シャローム》**月1回のモニタリング以外でも求めに応じて訪問し、お話を伺い、介助や対応方法等の助言など、介護者に安心して頂けるよう支援。給付実績稼働につながらないケースであっても不安や思いに寄り添い相談を受け、安心して頂けるよう支援を行っています。

**《ぶどうの木》**牧之原市民話かるた、七福神引き寄せレース、ペットボトル射的、恵方巻き作りゲーム割りばし抜き、ピンポン入れを皆で行う。

**ボランティア活動**

**個人★**活動者名（敬称略、順不同）久美子、林美鈴、大川原富美子、殿村隆夫、井部、大塚、小島。

**団体**　お話ボッポ（読み聞かせ）、岩本造園（庭木の手入れ・草刈り）、日赤奉仕団（ウエス切り、車椅子掃除）、さくら会（ゴミ出し）。

**実習生受け入れ状況**

〈ワークセンターコスモス〉

島田看護専門学校2名　2月6日・7日

**あとがき**

☆表紙の写真はディサービスセンター真菜のご利用者。聖ルカ遊歩道での歩行訓練後のコマ。

☆浅野正道様は、長年にわたり、里子を育ててこられたので、そのエピソードを書いていただきました。ご夫妻は今も、小さな頃から居る里子の大学生、高校生、計四人で暮らしておられます。

☆マスクの着用は個人の判断にゆだねられましたが、福祉施設での解禁はまだ先になります。〈I〉

## 寄付金状況報告

（単位：円）

| | 寄付金 | 指定寄付金 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 4月～1月 | 9,245,209 | 473,000 | 9,718,209 |
| 2月 | 544,230 | 0 | 544,230 |
| 計 | 9,789,439 | 473,000 | 10,262,439 |

※2022年度より、機関紙代収入は計上していません。すべて寄附金収入として、計上しています。